
郵便配達は2度も3度も4度も入れ間違ふ

ぺんとはるびたーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

郵便配達は2度も3度も4度も入れ間違っ

【Nコード】

N1417M

【作者名】

ぺんとばるびたーる

【あらすじ】

私は都会から田舎に越してきた平凡なサラリーマン。不気味なアパートに住んでいるが、他の住人との面識は無い。

ある日、奇怪な文章を綴った封筒が届く。しかしそれは私宛ではなく他の住人宛のものであった。

翌日、宛先人の住人が私を訪ねてくるところから不思議な出来事が起こる。

く後藤有紀と山下？く

…口をぽかんとあけて、空を見上げている私に『自称山下』と名乗る謎の中年は得意げな顔で言い放った。「もう間に合わない。振り出した。」と…

「…さてとっ」

自分ひとりしかないアパートの個室で、誰が聞いているわけでもないのにそう呟き、パソコンの電源を切る。

不意に腹が減った気がしたので冷蔵庫の中を物色する。

腹が減っては戦ができぬ。

しかし、現に敵などいない。強いて興ずる戦など無い。

それ以前に冷蔵庫には腹の足しになるようなものは何も無い。

仕方なく近くのコンビニまで足を運ぶことにした。

以前にもこんな風にコンビニまで足を運ぼうとしたことがあったようないきがするが、思い出せない。

私がこのアパートに引っ越してきたのは今から約2年前。仕事の都合で、と言うかかつこよく言えば大人の都合で、俗に言う都会からはるばる田舎風情漂う文字通りの田舎にやってきたのだ。

大人の都合とはすなわち左遷である。

私が何をやらかし、どのような偶然が重なってこの地にやってきたかは言及しないことにする。言及したところで腹の足しにはならない。

そそくさと部屋を出てコンビニへと向う。

既に時間は夜中の2時を過ぎており、このビジネスホテルを改築したような建物は、真昼であっても甚だ不気味だ。事実、私はここへ来て2年経つが、他の部屋の住人と面識が無い。それどころか、他の部屋の住人がいるかどうかすら知らない。

各部屋ごとに振り分けられた郵便ポストには一応郵便物は届いているし、決まった日にそれぞれ決められたゴミが決められた場所に出されているので、私と同じ「人間」と呼ばれる生物が生息していることは確かである。出ているゴミの中身から判断しても結果は同じだ。

しかし、事実2年間も会ったことが無い、廊下ですれ違ったことすらないのは、この建物の感じも手伝って甚だ不気味だ。

そんなことを思いながら、薄暗い廊下を、いるかどうかもわからない部屋の住人に気を使いながら、静かに階段へ向い歩いていった。私の部屋は建物2階の端にあり、ベランダは北を向いている。建物は3階建てなのであまり陽が入らない。その代わり、異様な柄の節足動物の類がよく入ってくる。

廊下を挟んで部屋があり、その薄暗い廊下を進むと突き当たりになり、階段がある。

普段にもまして不気味な雰囲気が漂っていたため、私は階段を下りて出入り口へと急いだ。

出入り口付近には郵便ポストが設置してある。各部屋それぞれ起居の形跡たる郵便物が入っている。無論、私の郵便ポストにもである。その私の郵便ポストに一通の、白くてどこにでもあるような封筒が入っていた。

丁寧に押し入れられるでもなく、半分その白く弱々しい身体をさら

しだし、「今すぐ読め」と言わんばかりに訴えかけてくる。

そういえば先日からあったような気もするが、実家から帰ったら読もうとして、今朝帰ってきた時に取り損ね、そのままだったことを思い出した。その時は一刻も早くトイレに駆け込み、用を足すことが私の最重要任務であった。

無造作に封を開け、中身を取り出す。封筒と同じような色をした白い紙が入っており、これまた無造作に読む。

27歳独身男性が、自身の起居するアパートのポストの前で、自身の郵便物と呼んでいる光景は、ごくありふれた光景ではあると思うが、封筒の中身の内容はごくありふれたものではなかった。要約するとこうなる。

『約束の日が近いので恐怖の大王が降ってくる。空を飛んでいつて地球に落ちる前に止めたい。至急応援にきてくれ』

意味がわからん、と何気なしに封筒を見ると、宛先が私ではなく私の部屋の斜め向かいの部屋の住人宛てであった。郵便配達が入れ間違えたのか、それとも宛先の住人の気心知れた友人のただの悪戯なのか、私は急いで部屋へもどり、丁寧に封を閉じ、しかるべき宛先のポストへと投函した。もちろん部屋とポストの往復も、いるかもわからない他の住人に気を使うべく細心の注意を払った。

そんなわけで、結局コンビ二には行く気をなくし、部屋に帰って静かに眠りにつくことにした。

翌日、その日は休みであったため心置きなく、自然と目が覚めるまで眠っていた。いや、正確には眠っているつもりであった。眠っているつもりであったが、しきりに鳴る部屋のチャイムの音で目が覚めた。

眠気で意識が朦朧としながら、眠気眼で扉を開けた。扉越しに何の確認もせず扉を開けてしまったが、そこには一人の女性が立っていた。

無防備、文字通り無防備であった。そこにいたのは私と同じぐらいの年頃の、気品漂う、それでいてどこか謎めいて艶かしい女性が立っていた。ちゃんと扉越しに確かめてから開けるべきであった。

しかし、そんなことを考えている私をよそに、その気品漂う女性は息継ぎせず一気に緊迫した面持ちでこう言った。

「朝早くからスイマセン、急なことで失礼なのですが、ひとつ頼まれてくれませんか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1417m/>

郵便配達は2度も3度も4度も入れ間違い

2010年10月8日22時10分発行